

《温故知新プロジェクト》

保育園児の魚介類およびその料理に対する嗜好（2016年）

—肉類・乳類との比較—

戸塚清子<sup>\*1</sup> 島村綾<sup>\*2</sup> 田中隆介<sup>\*3</sup> 峯木眞知子<sup>\*2</sup>

The Preferences of Seafood and Their Dishes among Japanese Children in 2016  
—Comparison with Liking for Meat and Dairy Products—

Kiyoko TOTSUKA, Aya SHIMAMURA, Ryusuke TANAKA, and Machiko MINEKI

1. 緒言

「和食：日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に平成25年に登録された。和食については、寿司をはじめ世界中の人に広まってきている。しかし、その寿司に用いられる魚介類の摂取量は日本では減少傾向にある。著者は、既に1990年、1996年、2001年、2006年および2012年に、全国各地にある保育所に通う幼児を対象に、魚介類およびその料理に対する嗜好についてのアンケート調査を行った<sup>1-5)</sup>。その結果、いずれの年でも、幼児（1990年1036人、1996年1418人、2001年1966人、2006年1342人、2012年1824人）の70%は魚介類を好み、その好む調理法および魚種には、在住する地域による違いがみられた。2001年より、同じ動物性たんぱく食品である肉類を質問項目に追加し、2006年より乳類に対する嗜好も加えた。本研究では、これらに引き続き、2016年に幼児の魚介類・肉類・乳類に対する嗜好の調査を行った。調査地区は、25年間アンケート調査に協力いただいた8地区の保育所とした。その結果より、食環境の変化が幼児の魚介類・肉類、乳類の嗜好に及ぼす影響について分析し、考察する。

これらの結果は、これからの幼児の食生活における魚介類料理の方向性を考える資料となる。それらの解析により、食生活の変化をとらえ、魚介類摂取における今後の展望を推測する。

2. 調査方法

1) 調査対象

全国8地区（秋田、仙台、宇都宮、東京、甲府、長野、黒部、高知）にある保育所に通所する3歳以上の園児の保護者に、アンケート用紙を配布し、留置法により回収した（有効数922部）。今回の調査は、前報の調査<sup>1-5)</sup>と同様に、

漁港を有する秋田、仙台、黒部、高知を海岸部（410名、44.5%）、魚介類の流通が速いと思われる大都市の東京を都市部（153名、16.6%）、宇都宮、甲府、長野を内陸部（359名、38.9%）の3区分に分類して、地域による違いも検討した。

調査項目は、魚介類・肉類・乳類に対する幼児および両親の嗜好、魚介類・肉類・乳類の調理法に対する嗜好、魚種18種および魚介類を用いた伝統的料理に対する嗜好などである。調査期間は2016年7月～10月である。アンケートは無記名式で行い、個人情報の遵守に関する注意の説明用紙を添付し、同意をえられた保護者に実施した。なお、本学の倫理委員会の承認を得た。

2) 統計処理

調査の集計には、統計用ソフト SPSS バージョン24.0を用い、有意差検定には、 $\chi^2$ 検定およびスピアマン順位相関係数を用いた。

3. 調査結果および考察

1) 調査対象者

調査対象の幼児は、922名であり、男50.0%、女49.7%で、3歳20.8%、4歳33.2%、5歳33.3%、6歳12.7%で、第一子が52.5%で多かった（表1）

対象の都市は、秋田（78名）・仙台（106名）、宇都宮（112名）・東京（153名）・甲府（101名）・長野（146名）黒部（114名）・高知（112名）であった。

2) 幼児の魚介類、肉類および乳類に対する嗜好

(1) 魚介類に対する嗜好

幼児の魚介類に対する嗜好は、大好き23.6%、好き44.1%、普通27.4%、嫌い4.2%であった。2012年の調査では、大好き27.6%、好き41.7%であったので、前回の調査と比較すると大好きな割合は4.1%低かった（ $p<0.05$ 、図1）。魚介類が嫌いと答えた幼児は4.2%で、1991～2012年の調査いずれも2～3%であったのに対して高い数

<sup>\*1</sup> 大妻中学高等学校（Otsuma Junior & Senior High School）

<sup>\*2</sup> 東京家政大学（Tokyo Kasei University）

<sup>\*3</sup> 東邦大学医療センター大橋病院（Toho University Ohashi Medical Center）

表1 アンケート対象者の属性

項目	年齢				性			第何子				合計
	3歳	4歳	5歳	6歳	男	女	未記入	第一子	第二子	第三子	第四子以上	
人数	192	306	307	117	461	458	3	484	329	95	14	922
%	20.8	33.2	33.3	12.7	50.0	49.7	0.3	52.5	35.7	10.3	1.5	100.0
項目	対象都市								家族構成			未記入
	秋田	仙台	宇都宮	東京	甲府	長野	黒部	高知	祖父母同居	核家族	父母子	
人数	78	106	112	153	101	146	114	112	179	699	43	1
%	8.5	11.5	12.1	16.6	11.0	15.8	12.4	12.1	19.4	75.8	4.7	0.1

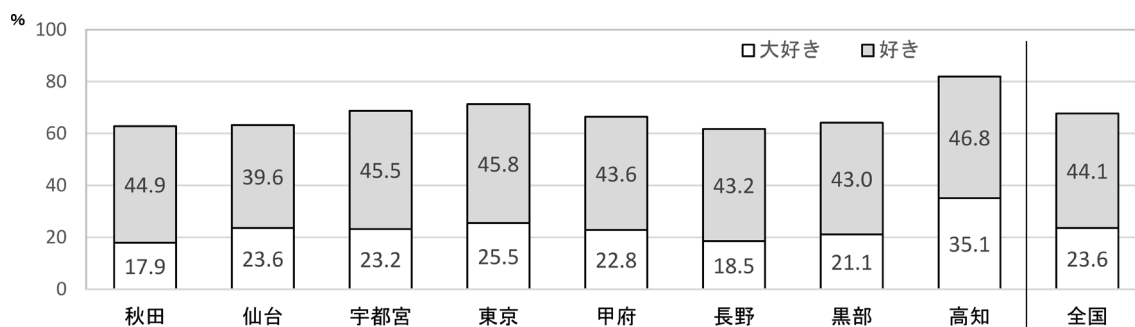


図1 都市別幼児の魚介類に対する嗜好

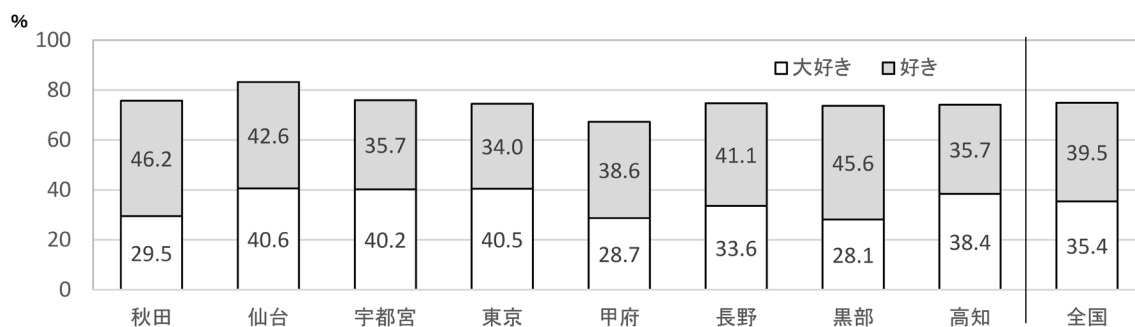


図2 都市別幼児の肉類に対する嗜好

値であった。都市別にみると、高知市では幼児の81.9%が大好き・好きと答えた割合が高く、特に大好きは35.1%であり、東京地区がそれに次いでいた。大好き・好きと答えた割合が低いのは、秋田、仙台、長野市であった。秋田市では前回の調査より大好きな割合は10.2%も低い値であった。また、海岸部である黒部市（64.1%）では、好きな割合は、約13%も低下していた。

魚介類が嫌いと答えた幼児の割合が多かった都市は、秋田（7.7%）、長野（6.2%）であった。

このことから、地域による魚介類の嗜好は、海岸部、都市部、内陸部の違いは更に少なくなっていることが考えられた。

## (2) 肉類に対する嗜好

幼児の肉類に対する嗜好では、大好き35.4%、好き39.5%であった（図2）。特に大好きと答えた割合が40%以上であった都市は仙台、宇都宮、東京であった。肉類の嗜好は甲府市の幼児が低かった。幼児が大好き・好きと答えた割合が75%以上の地区は、仙台（83.2%）、宇都宮

（75.9%）秋田（75.7%）で、東京以北が高い値を示した。

## (3) 乳類に対する嗜好

乳類に対する嗜好は大好き31.3%、好き44.0%で、約75%の幼児が好んでいた（図3）。

幼児の乳類に対する嗜好を都市別にみると、幼児が大好き・好きと答えた割合が75%以上の地区は、高知（80.4%）、東京（79.1%）、甲府（78.2%）、秋田（78.2%）、宇都宮（77.7%）であった。特に大好きと答えた割合が多かったのは、長野（38.4%）、東京（36.6%）、秋田（35.9%）であった。仙台、黒部市の幼児では低い割合を示した。

動物性タンパク質食品に対する幼児の大好き・好きの割合は、魚介類が約67%で最も低く、肉類は74.9%、乳類が75.3%で、肉類を好む割合が増加して、肉類・乳類を好む割合は同様の割合を示した。この結果を、2012年調査結果と比較すると、幼児の大好き・好きの割合は魚介類が2%低下し、肉類は1%高く、乳類は4%低下していた。

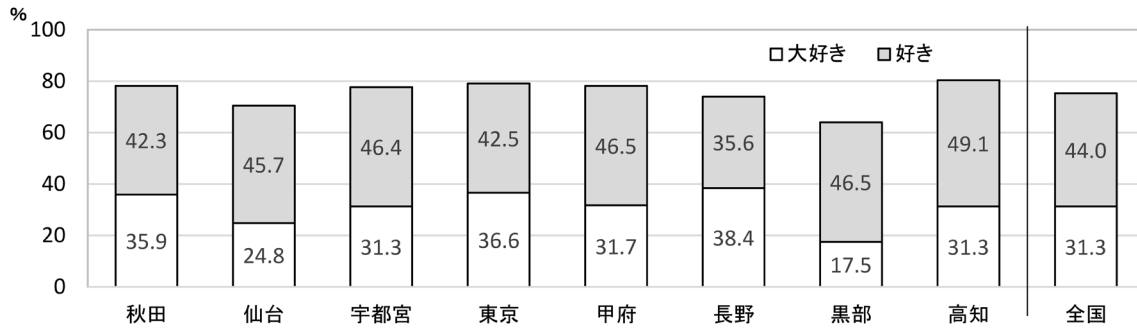


図3 都市別幼児の乳類に対する嗜好

### 3) 母親の魚介類・肉類・乳類に対する嗜好

母親の魚介類に対する嗜好は、大好き32.1%、好き43.3%、嫌い2.0%で、母親の約75%が好んでおり、幼児67%より高い値を示した（図4）。2012年と比較すると、母親の大好き・好きの割合は1%低下していた。

母親の魚介類に対する嗜好を都市別にみると、大好き・好きと答えた割合が75%以上の地区は、東京（86.3%）、高知（80.4%）、黒部市（78.9%）であった。嗜好が高い都市は黒部市を除き、幼児の都市別嗜好と同じであった。大好き・好きの割合が低かったのは、長野、甲府市の内陸部の都市であった。母親の魚介類に対する嗜好は、地域性が存在し、都市部・海岸部で高く、内陸部で低かった。

母親の肉類に対する嗜好は、大好き32.4%、好き42.1%、普通23.2%、嫌い1.8%で、母親の約75%が好んでおり、魚介類とほぼ同じように好まれていた。

母親の乳類に対する嗜好は、大好き31.2%、好き49.0%、で、母親の約80%が好んでおり、動物性たんぱく質の中で最も好まれていた。

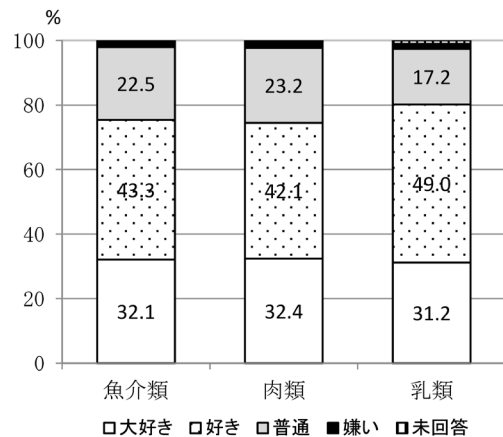


図4 母親の魚介類・肉類・乳類に対する嗜好

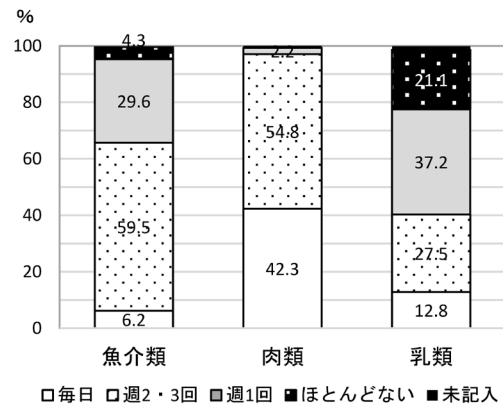


図5 夕食の食卓に上がる頻度

### 4) 魚介類・肉類・乳類が夕食に上がる頻度

#### (1) 魚介類が夕食に上がる頻度

魚介類が夕食に上がる頻度は、毎日6.2%、週2・3回59.6%、週1回程度29.6%、ほとんどない4.3%であった（図5）。

2012年調査結果と比較すると、魚介類は夕食に毎日上がると答えた割合はさらに2%低下していた。

#### (2) 肉類・乳類が夕食に上がる頻度

肉類が夕食に上がる頻度は、毎日42.3%、週2・3回54.8%、週1回程度2.2%、ほとんどない0%で、2012年調査と比較すると毎日と答えた割合が、11%増加していた。

乳類が夕食に上がる頻度は、毎日12.8%、週2・3回27.5%、週1回程度37.2%、ほとんどない21.1%であった。乳類は、夕食であまり供されていないかった。

### 5) 夕食に費やす調理時間

保護者が夕食に費やす調理時間は、30分未満6.7%、30分位34.9%、45分位35.5%、60分位18.2%、60分以上3.2%であった（図6）。調理時間は調査年が多くなるにつれて、減少する傾向を示した。

1996年調査では、60分位が32.9%で最も多かったのが、2016年調査では30分位と30分未満を足した割合が41.6%と最も多く、調理に時間をかけない家庭が増えてきた。中食、半調理食品や加工食品の利用が考えられる。国民健康・栄養調査<sup>6)</sup>によると、持ち帰りの弁当・惣菜を週1回

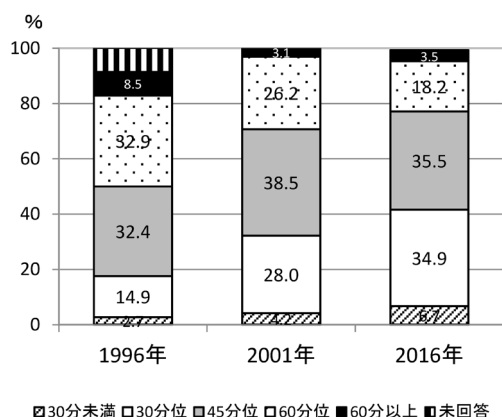


図6 夕食に費やす調理時間

以上利用している者の割合は、男性41.1%、女性39.4%であり、20～50歳代ではその割合が高いとしている。

#### 6) 幼児が好む調理法

幼児が好む調理法は、焼く(86.3%)、生・刺身(50.1%)、煮る(44.9%)、揚げる(35.4%)、油焼き・ソテー(35.1%)、蒸す(22.5%)、缶詰(11.1%)、中華(3.4%)の順であった。2012年調査と比べると、生・刺身、煮る、油焼き・ソテーを好む割合が低下していた。

以上、2016年に行った幼児の魚介類の調査より、肉類の嗜好が上がり、魚類の嗜好が減少していた。国民健康・栄養調査によると<sup>6)</sup>、幼児(1～6歳)の魚介類の摂取量は、2001年40.2g、2015年30.5gでかなり減少している。一方、幼児(1～6歳)の肉類の摂取量は、2001年51.7g、2015年57.4gと増加している。嗜好は摂取量と関連していることが、本研究でもわかった。

#### 4. ま と め

- 1) 全国8地区、922名に対し、2016年に魚介類に対する嗜好のアンケート調査を行った。
- 2) 幼児の魚介類を好む割合は、2012年より減少したが、肉類を好む割合は増加した。乳類を好む割合は変化がなかった。魚介類の摂取量の減少が考えられる。
- 3) 母親の魚介類に対する嗜好は、幼児より高く、75%が好んでいた。

4) 幼児が好む魚の調理法は、焼く、生・刺身、煮る、揚げる、油焼き・ソテーの順であった。

5) 夕食に上がる頻度については、魚介類は少なくなっており、肉類は増加していた。

6) 夕食に費やす調理時間は、年々減少していた。

本研究は本学生活科学研究科より研究助成金を頂いて行うことができた。現在も調査のデータを解析中である。なお、この内容の一部は第69回家政学会(平成29年5月)に発表した。

#### 謝 辞

この研究を行うのに際して、ご援助いただきました東京家政大学生生活科学研究科に厚く御礼を申し上げます。

また、アンケート調査をするにあたり、保育所を紹介いただきました秋田市役所子ども未来子ども総務部育成課、仙台市役所子ども未来局保育部保育課運営係、宇都宮市役所福祉部、サンフラワー・A(株)、甲府市役所子ども未来子ども未来総室子ども保育課、長野市役所保育課、黒部市役所子ども支援課保育所・幼稚園班、高知市福祉事務所保育課の方々、また、アンケート調査にご協力いただきました保育所の皆様方にも厚く御礼申し上げます。

#### 文 献

- 1) 峯木真知子「魚介類及びその伝承料理に対する幼児の嗜好調査」『青葉学園短期大学紀要』, 第18号, 1993, pp. 47-52.
- 2) 戸塚清子・峯木真知子・井戸明美「魚介類およびその料理に対する全国保育園児の嗜好とそれに影響する要因」『日本調理科学会誌』第34巻, 2001, pp. 205-213.
- 3) 峯木真知子・棚橋伸子・戸塚清子「魚介類およびその料理に対する全国保育園児の嗜好(2001年)」『日本家政学会誌』第56巻, 2005, pp. 857-865.
- 4) 峯木真知子・戸塚清子「魚介類及びその料理に対する全国保育園児の嗜好(2006年)」『日本家政学会誌』第62巻, 2011, pp. 387-394.
- 5) 戸塚清子・峯木真知子「魚介類及びその料理に対する全国保育園児の嗜好の変遷—1996年～2012年調査—」『日本食生活学会誌』第27巻, 2016, pp. 31-39.
- 6) 厚生労働省「平成27年国民健康・栄養調査の結果」<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10904750-Kenkoukyoku-Gantaisakukenkouzoushinka/kekagaiyou.pdf> pp7,44